

急な医療が必要なとき

赤ちゃんや子どもの病気やケガは、休日や夜に関係なくおそってきます。一刻をあらそう場合がないとも限りません。そんな時あわてず落ち着いた対処が赤ちゃんの命を救う結果につながります。応急処置や救急車の呼び方、休日に診てくれる病院など、日頃から頭に入れていざという時に備えてください。

※休日当番医は、毎月発行の「広報あばしり」をご覧ください。

胸骨圧迫

〈乳児〉



●乳児の場合

乳首と乳首を結んだ線の真ん中より少し足側を指2本で押す。(1分間に100~120回の速さ)

〈小児〉



●小児の場合

乳首と乳首を結んだ線の真ん中を片手で押す。(1分間に100~120回の速さ)

人工呼吸法

〈乳児〉

●乳児の場合

口と鼻を口に入れ息を吹き込む。



〈小児〉



●幼児と小児の場合

鼻をつまんで口に息を吹き込む。
※どの場合も、1回ごとに胸が軽く膨らむ程度に1秒吹き込む。



心肺蘇生法の仕方 (1人で行う場合)

対象	乳児 (1歳未満)	小児 1歳~思春期以前 (15歳程度・中学生 生まだが目安)
圧迫の スピード	1分間に 100~120回	1分間に 100~120回
圧迫 回数	2指で30回	両手又は 片手で30回
圧迫の 深さ	胸の厚さの 3分の1 へこむ程度	胸の厚さの 3分の1 へこむ程度
人工 呼吸	2回	2回

※消防署では、病気、事故を想定した救急救命講習を行っています。

●問い合わせ先／

網走消防署

警防課救急係 ☎43-9419

網走消防署

南出張所 ☎43-3016

救急車の呼び方

1

119番をまわす

- 「救急車をお願いします。」

2

場所を告げる

- 地名、番地、アパート名、氏名を告げ、目印があればそれも伝える。

3

病気、事故の内容の説明

- どういった状態か、患者の年齢、性別、容体等を落ち着いて伝え、必要により応急処置の指示を受ける。

4

救急車の誘導

- まわりにいる人が救急車を
出迎え、誘導してもらう。

5

救急車が到着したら

- 応急処置の内容を報告する。
- 持病があれば、告げてかかりつけの病院、医師名を告げる。
- 服用している薬があれば、報告する。
- 病院に行く時は健康保険証を持っていく。



※携帯電話からの119番通報は近郊の消防署につながる可能性がありますので正確な住所を伝えてください。
網走消防署には (0152-43-2221) で直接つながりますので登録しておくことをお奨めします。

4 小児救急医療

❁ 大変危険です。子どもの誤飲!!

子どもは「はいはい」や「伝い歩き」をするようになると、手に触れたものを何でも口に入れるようになります。(財)日本中毒情報センターの中毒110番への問い合わせは5歳以下の小児、特に生後6ヶ月～2歳未満の乳幼児の誤飲事故が大部分を占めています。

下の絵は誤飲事故の多いものです。このようなものがお子さんの手の届くところに放置されていませんか？



子どもの誤飲事故が起こったら 応急手当の基礎知識

- ・意識がない、けいれんを起こしているなど、すでに重い症状がある時は、直ちに救急車を呼びます。意識があり、呼吸・脈拍に異常がない場合は、何を、どの位の量を誤飲して、どの位の時間が経っているのかを確認し、症状がある時は、すぐに医療機関を受診します。
- ・家庭で無理に吐かせると、吐いたものが気管に入ってしまうことがあり危険です。下表のように牛乳や水を飲ませて薄めるとよいものもありますが、飲ませるとよくないものもあります。

誤飲したもの (色のついた字のものは吐かせてはいけません)	牛乳を 飲ませる	水を 飲ませる	理由
石油製品 (灯油、マニキュア、除光液、液体の殺虫剤など)	×	×	・吐かせたり、牛乳または水を飲ませることで吐きやすくなると、吐物が気管に入りやすくなり、入ると肺炎を起こす。
容器に「酸性」または「アルカリ性」と表示されている製品 (漂白剤、カビ取り剤、トイレ/パイプ/換気扇用洗剤など)	○	○	・誤飲時にのどや食道に「やけど」を起こしており、吐かせると薬剤が再びのどや食道を通るため「やけど」がひどくなる。 ・牛乳または水は薬剤の「やけど」を起こす作用を和らげる。
防虫剤 (しょうのう、ナフタレン、パラジクロルベンゼン)	×	—	・しょうのう(樟脳)は吐かせると、けいれんを起こしやすくなる。 ・防虫剤は牛乳に含まれる脂肪に溶けて体内に吸収されやすくなる。
たばこ(葉、吸殻)	×	×	・たばこの有毒成分「ニコチン」が体内に吸収されやすくなる。
界面活性剤を含む製品 (洗濯用や食器用の洗剤、シャンプー、石けんなど)	○	○	・牛乳または水はのどや食道、胃に対する界面活性剤の刺激を和らげる。
石灰乾燥剤、除湿剤など	○	○	・牛乳または水は薬剤の「やけど」を起こす作用あるいは刺激を和らげる。

×：行ってはいけない、○：行ったほうが良い、—：どちらでもない

ストップ!! 子どもの誤飲事故

▼大人がちょっと目を離れた際に起こります!!

誤飲事故は、台所仕事をする、電話にでる、洗濯物を干すなど、子どもからほんのちょっと目を離れた際に、あるいは大人が見ている目の前でも起こります。詳しくは、日本中毒情報センターホームページ <http://www.j-poison-ic.or.jp>の「市民のための中毒の知識」をご覧ください。

▼大切なことは、事故の防止です。 ●年齢に応じて子どもの目線も変わります。

子どもの誤飲事故は、子どものまわりにいる大人が注意することで防げます。注意するものは、子どもの年齢に応じて変わります。日頃から危険なもの子どもの手の届かない高い所か、鍵のかかる所に保管する心がけが必要です。



年齢の目安	注意するもの（後始末や保管管理）
6ヶ月～ 12ヶ月	床や畳など、低い位置のものに注意 たばこや吸殻、床の上のホウ酸団子や液体蚊取り
1歳～2歳	テーブルの高さにあるものにも注意（台に登ることがある） リモコン・玩具・キッチンタイマーの電池 洗面台や流しの下洗剤、ポリタンクの灯油ポンプ 防虫剤、鏡台の化粧品、シャボン玉液などの玩具
3歳～5歳	高い場所にも注意（行動範囲がより広がる） 棚上の救急箱、引き出しの中のくすり 冷蔵庫の中のシロップ薬、流しの漂白中のコップ

中毒110番 専用電話 判断に迷ったら問い合わせを!

*あわてずに誤飲したものを手に持って、お子さんの年齢や体重、誤飲したものの正確な名称、飲んだ量など事故の状況をお伝えください。

大 阪：072-727-2499 つくば：029-852-9999
(365日 24時間対応) (365日 9～21時対応)

化学物質（たばこ、家庭用品など）、医薬品、動植物の毒などによる中毒事故が実際に起きて、どう対処したらよいか迷った時にご相談ください。応急手当や受診の必要性を薬剤師、獣医師がアドバイスします。ただし、異物誤飲（プラスチック、石、ビー玉など）や食中毒、慢性の中毒（アルコール中毒、シンナー中毒など）や医薬品の常用量での副作用についての相談には応じていません。



たばこの誤飲

■小児の誤飲事故が一番多いのは「たばこ」です

中毒110番へのたばこ（吸殻を含む）についての相談件数は、年間3,600件、1日平均10件でこれは全相談件数の1割に相当します。たばこや灰皿を小児の手の届く場所に置かないようにしましょう。また、ジュースやビールの空き缶を灰皿の代わりに使うのはやめましょう。



■「たばこ」を食べてしまったら

症 状

30分～4時間後に吐いたり、顔が青白くなり、よだれや冷や汗が多く出たり、元気がなくなったりといった症状が現れます。

その時の対応

1. たばこの葉や吸殻を大量に（2cm以上）食べた時、あるいは、灰皿の水などたばこが浸かった液を飲んだ時は、すぐに医療機関を受診します。
2. 乾いたたばこを少量（2cm未満）食べた時は、症状がなければ家庭で経過を観察します。経過観察中に症状があらわれた時はすぐに医療機関を受診します。まる1日（24時間）経って異常がなければ安心できます。

【注意】 たばこに対する感受性は個人差が大きく、少量でも症状が出る場合があります。

たばこ誤飲事故専用電話 072-726-9922 (365日 24時間対応)
(テープによる情報提供)